人形使い

豊島与志雄

一

むかし、ある田舎（いなか）の小さな町に、甚兵衛（じんべえ）というたいへん下手（へた）な人形使（にんぎょうつか）いがいました。お正月だのお盆（ぼん）だの、またはいろんなお祭（まつ）りの折（おり）に、町の賑（にぎ）やかな広場に小屋（こや）がけをして、さまざまの人形を使いました。けれどもたいへん下手（へた）ですから、見物人（けんぶつにん）がさっぱりありませんで、非常（ひじょう）に困（こま）りました。「甚兵衛の人形は馬鹿（ばか）人形」と町の人々はいっていました。

甚兵衛は口惜（くや）しくてたまりませんでした。それでいろいろ工夫（くふう）をして、人形を上手（じょうず）に使おうと考えました

が、どうもうまくゆきません。しまいには、もう神様（かみさま）に願（ねが）うよりほかに、仕方（しかた）がないと思いました。

どの神様（かみさま）がよかろうかしら、と甚兵衛はあれこれ考えてみました。町にはいくつも神社（おみや）がありましたが、上手（じょうず）に人形を使うことを教（おし）えてくださるようなのは、どれだかわかりませんでした。さんざん考えあぐんだ末（すえ）、いっそ人のあまり詣（まい）らぬ神社（おみや）にしようと、一人できめました。

町の裏手（うらて）に山がありまして、その山の奥（おく）に、淋（さび）しい神社（おみや）が一つありました。甚兵衛は毎日、そこにお詣（まい）りをしました。あたりには大きな杉（すぎ）の木が立ち並（なら）んでい

て、昼間（ひるま）でも恐（おそ）ろしいようなところでした。けれども甚兵衛（じんべえ）は一心になって、どうか上手（じょうず）な人形使いになりますようにと、神様（かみさま）に願（ねが）いました。

　ある日のこと、甚兵衛はいつものとおりに、その神社（おみや）の前に跪（ひざまず）いて、長（なが）い間（あいだ）お祈（いの）りをしました。そしてふと顔（かお）をあげてみますと、自分のすぐ眼（め）の前に、真黒（まっくろ）なものがつっ立っていました。甚兵衛はびっくりして、あっ！　といったまま、腰（こし）を抜（ぬ）かさんばかりになって、そこに倒（たお）れかかりました。するとその真黒（まっくろ）なものが、からからと笑（わら）いました。甚兵衛は二度（ど）びっくりして、よくよく眺（なが）めますと、それは一匹の猿（さる）でした。

「甚兵衛さん、甚兵衛さん」と猿はいいました。

甚兵衛は口をあんぐり開いたまま、猿の顔を眺めていました。それを見て猿はまた笑いだしながら、いい続けました。

「甚兵衛さん、なにもびっくりなさることはありません。私はこの神社に長く住んでいる猿でありますが、人間のように口を利くこともできますし、どんなことでもできます。あなたが毎日熱心にお祈りなさるのを感心して、上手に人形を使うことを教えてあげたいと思って、ここにでてまいったのです。けれどもその前に、あなたに一つお頼みしたいことがありますが、聞

いてくださいますか」

そういう猿の声がたいへんやさしいものですから、甚兵衛もようよう安心しました。そして答えました。

「お前さんが私を上手な人形使いにしてくれるなら、頼みを聞いてあげよう」

そこで猿はたいそう喜びまして、頼みの用をうち明けました。用というのは、大蛇を退治することでした。いつの頃からか、山に大蛇がでてきまして、いろんな獣を取っては食べ、猿の仲間までも食べ初めました。それでこの猿は、さまざまに工夫をこらして、大蛇を山から逐い払おうとしましたが、どうしても敵

いませんでした。そして甚兵衛に、大蛇退治を頼んだのでした。

「お前はなんでもできるといったのに、大蛇位なものに負けるのかい？」と甚兵衛はいいました。

「はい」と猿は面目なさそうに答えました。「智慧でなら誰にも負けませんが、力ずくのことは困ってしまいます。甚兵衛さん、どうかその大蛇を退治てください」

甚兵衛もそれには困りました。なにしろ相手は大蛇ですもの、へたなことをやれば、こちらが一呑みにされてしまうばかりです。長い間考えこんでいました

が、いい考えを思いついて、はたと額を叩きました。

「そうだ、これなら大丈夫。ねえ猿さん、お前は猿智慧といって、たいそう利巧だそうだが、案外馬鹿だなあ。今私が大蛇を退治てあげるから、見ていなさいよ」

甚兵衛は急いで家へ帰りまして、綺麗な女の人形を一つ取り、その中に釘をいっぱいつめて、釘の尖った先が、皆外の方に向くように拵えあげました。それを持って猿の所へもどってきました。

「そんな人形をなんになさいます？」と猿は不思議そうに尋ねました。

「まあいいから、私のすることを見ていなさい」と甚兵衛は答えました。

彼は猿に案内さして、大蛇のでてきそうなところへ行き、そこに女の人形を立たせました。そして猿と二人で、大蛇に見つからないような蔭に隠れて、じっと待っていました。

しばらくすると、ごーと山鳴りがしてきまして、向うの茂みの間から、樽のように大きな大蛇が、真赤な舌をぺろりぺろりだしながら、ぬっと現われでました。大蛇は人形を見ると、それを生きた人間と思ったのでしょう、いきなり大きな鎌首をもたげて、恐ろしい

勢(いきおい)で寄(よ)ってきました。そして側(そば)に寄(よ)るが早いか、その大きな身体(からだ)で、ぐるぐると人形に巻(ま)きついて、力いっぱいにしめつけました。ところが人形には、薄(うす)い着物(きもの)の下に釘(くぎ)がいっぱい、尖(とが)った先(さき)を外に向(む)けてつまっているのです。いくら大蛇(おろち)でもたまりません。柔(やわら)かな腹(はら)の鱗(うろこ)の間(あいだ)に、一面(めん)に釘(くぎ)がささりまして、そこから血(ち)が流(なが)れだし、そのまま死(し)んでしまいました。

二

首尾(しゅび)よく大蛇退治(おろちたいじ)ができましたので、猿(さる)はたいへん

喜(よろこ)びました。

「お蔭(かげ)で山の中の獣(けもの)は、皆助(みなたす)かります。これから、お約束(やくそく)ですから、上手(じょうず)に人形を使うことを、あなたにお教(おし)えしましょう。ただ黙(だま)って、私のいうとおりになさらなければいけませんよ」

甚兵衛(じんべえ)は承知(しょうち)しました。猿(さる)は甚兵衛の家へやってきました。そして家にある人形を皆(みな)売ってしまいなさいといいました。甚兵衛は人形を残(のこ)らず売ってしまいました。すると猿(さる)はいいました。

「三日の間(あいだ)、この人形部屋(べや)にはいってはいけません。三日たったらこの部屋(へや)においでなさい、すると大きな

人形が一つ立っています。その人形はなんでも、あなたのいうとおりにひとりでに動（うご）きます」

甚兵衛（じんべえ）は不思議（ふしぎ）に思いましたが、ともかくも猿（さる）のいうとおりにして、三日間人形部屋（べや）の襖（ふすま）を閉（し）め切って置（お）きました。猿（さる）はどこかへ行ってしまいました。三日たってから、甚兵衛はそっと人形部屋（べや）を覗（のぞ）いてみました。すると部屋（へや）の真中（まんなか）に、大きなひょっとこの人形が立っています。

甚兵衛はびっくりしましたが、猿（さる）の言葉（ことば）を思いだして、手をあげろと人形にいってみました。人形はひとりでに手をあげました。歩けと甚兵衛はいってみまし

た。人形はひとりでに歩きだしました。それから、踊れといえば踊るし、坐れといえば坐るし、人形はいうとおりに動き廻るのです。甚兵衛は呆れ返ってしまいました。そしてぼんやり人形を眺めていますと、その背中が、むくむく動きだして、中から、猿が飛びだしてきました。

「甚兵衛さん、びっくりなすったでしょう。なあに、私が中にはいっていたんです。あの人形は空っぽで、背中に私の出入口がついてるのです。大蛇を退治てくださったお礼に、これから私が人形を踊らせますから、それであなたは一儲けなさい。私も山の中より町の方

が面白いから、御飯だけ食べさしてくだされば、長くあなたの側に仕えて、人形を踊らせましょう」
なるほど猿が中にはいっておれば、人形がひとりでに踊るのも不思議ではありません。甚兵衛は手を打って面白がりました。

やがて町の祭礼となりますと、甚兵衛は一番賑やかな広場に小屋がけをしまして、「世界一の人形使い、独りで踊るひょっとこ人形」という看板をだしました。町の人たちは、あの馬鹿甚兵衛がたいそうな看板をだしたが、どんなことをするのかしらと、面白半分に小屋へはいってみました。

正面に広い舞台ができていました。間もなく甚兵衛は、大きなひょっとこの人形を持ちだし、それを舞台の真中に据えまして、自分は小さな鞭を手に持ち、人形の側に立って、挨拶をしました。

「この度私が人形をひとりで踊らせる術を、神から授かりましたので、それを皆様にお目にかけます。このとおり人形には、なんの仕掛もございません」

そういって彼は、手の鞭で人形を二、三度叩いてみせました。それから鞭を差上げていいました。

「歩いたり、歩いたり」

人形は歩きだしました。

「廻ったり、廻ったり」

人形はぐるぐる廻りました。

「踊ったり、踊ったり」

人形はおかしな恰好で踊りました。

「飛んだり、跳ねたり」

人形は飛び跳ねました。

見物人は驚いてしまいました。なにしろ人形が独りで動き廻るのは、見たことも聞いたこともありません。皆立ちあがって、やんやと喝采しました。中には不思議に思う者もあって、舞台を調べてみたり、人形を検査したりしました。けれどももとより、舞台には

なんの仕掛もありませんし、猿は人形の中にじっと屈んでいますので、誰にも気づかれませんでした。そして、やはり、甚兵衛は神様から人形使いの法を教わったということになりました。さあそれが評判になりまして、「甚兵衛の人形は生人形」といいはやされ、町の人たちはもちろんのこと、遠くの人まで、甚兵衛の人形小屋へ見物に参りました。

三

町の祭礼がすみますと、猿は甚兵衛に向って、都に

でてみようではありませんかといいました。甚兵衛もそう思ってたところです。田舎(いなか)の小さな町では仕方(しかた)がありません。大きな都(みやこ)にでて、世間(せけん)の人をびっくりさせるのも楽(たの)しみです。それでさっそく支度(したく)をしまして、だいぶ遠(とお)い都(みやこ)へでてゆきました。

甚兵衛は、都(みやこ)の一番賑(にぎ)やかな場所(ばしょ)に、直(ただ)ちに小屋(こや)がけをしまして、「世界一の人形使い、独(ひと)りで踊(おど)るひょっとこ人形」という例(れい)の看板(かんばん)をだしました。すると、甚兵衛の評判(ひょうばん)はもうその都(みやこ)にも伝(つた)わっていますので、見物人(けんぶつにん)が朝からつめかけて、たいへんな繁昌(はんじょう)です。甚兵衛は得意(とくい)になって、毎日ひょっとこの人形を踊(おど)ら

せました。

ところがある日、甚兵衛は例のとおり、「歩いたり、歩いたり、……踊ったり、踊ったり、……飛んだり、跳ねたり」などといって、自由自在に人形を使っていますうち、つい調子にのって、「鳴いたり、鳴いたり」と口を滑らせました。けれども人形は一向鳴きませんでした。さあ甚兵衛は弱ってしまいました。でも一度いいだしたことですから、今さら取消すわけにはゆきません。甚兵衛は泣きだしそうな顔をして、人形の中の猿にそっと頼みました。

「猿や、どうか鳴いてくれ、私が困るから」

「では泣きましょう」と猿は答えました。
そこで甚兵衛は鞭を高く差上げ、大きな声でいいました。
「鳴いたり、鳴いたり」
人形は「キイ、キイ、キャッキャッ」と鳴きました。
見物人は驚いたの驚かないの、それはたいへんな騒ぎになりました。「人形が鳴いた」という者もあれば、「あれは猿の鳴き声だ」という者もあるし、一度に立ちあがってはやし立てました。すると甚兵衛は一きわ声を張りあげていいました。
「今のは猿の鳴き声であります。これからまた他の鳴

き声をお聞かせいたします。……さあひょっとこ人形、鳴いたり鳴いたり、犬の鳴き声」

人形は「ワン、ワン、ワンワン」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、猫の鳴き声」

人形は「ニャア、ニャア、ニャー」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、鼠の鳴き声」

人形は「チュウ、チュウ、チュチュー」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、狐の鳴き声」

人形は「コン、コン、コンコン」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、狸の鳴き声」

すると見物人は喜びました。誰もまだ、狸の鳴き声を聞いた者がありませんでした。皆静まり返って耳を澄しました。ところが、いつまでたっても人形は鳴きません。甚兵衛はまたくり返しました。

「鳴いたり鳴いたり、狸の鳴き声」

それでもまだ人形は鳴きませんでした。鳴かないのも道理です。人形の中の猿は、狸の泣き声を知らなかったのです。甚兵衛はそんなこととは気づかないで、三度くり返しました。

「鳴いたり鳴いたり、狸の鳴き声」

すると人形は大きな声でこういいました。

「狸（たぬき）の鳴（な）き声（ごえ）、知らない知らない、キイ、キイ、キャッキャッ」

それを聞（き）くと、小屋（こや）の中は沸（わ）き返（かえ）るような騒（さわ）ぎになりました。「狸（たぬき）の声を人形も知らない――人形が口を利（き）いた――猿（さる）の鳴（な）き声をした」とてんでにいいはやして、見物人（けんぶつにん）のほうが踊（おど）りだしました。

甚兵衛（じんべえ）は初め呆気（あっけ）にとられていましたが、やがて程（ほど）よいところで挨拶（あいさつ）をして、その日はそれでおしまいにしました。

甚兵衛と猿（さる）と二人きりになりますと、猿（さる）は顔（かお）から汗（あせ）を流（なが）しながらいいました。

「甚兵衛さん、今日(きょう)のように困(こま)ったことはありません。狸(たぬき)の鳴(な)き声を知らないのに、鳴(な)けとなん遍(べん)もいわれて、私はどうしようかと思いました」

「いや私もうっかりいってしまって、後(あと)で困(こま)ったなと思ったが、しかしお前が知らない知らないといったのは大できだった」

そして翌日(よくじつ)からは、踊(おど)りや鳴(な)き声を前からきめておいて、それだけをやることにしました。

四

ところがその都に、四、五人で組をなした盗賊がいまして、甚兵衛の人形の評判をきき、それを盗み取ろうとはかりました。そしてある晩、にわかに甚兵衛の所へ押し入り、眠ってる甚兵衛を縛りあげ、刀をつきつけて、人形をだせと嚇かしました。甚兵衛はびっくりして、あたりを見廻しましたが、猿はどこかへ逃げてしまって居ませんし、まごまごすると刀で切られそうですから、仕方なく人形のある室を教えました。盗賊どもは人形を奪うと、そのままどこかへ行ってしまいました。

盗賊どもが居なくなった時、押入の中に隠れていた

猿は、ようようでてきて、甚兵衛の縛られてる縄を解いてやりました。けれども盗賊どもが逃げてしまった後なので、どうにも仕方がありませんでした。ただこの上は、盗賊の住居を探しあてて人形を取り返すよりほかはありません。

それから毎日、昼間は甚兵衛がでかけ、夜になると猿がでかけて、人形の行方を探しました。けれどなかなか見つかりませんでした。ちょうど半月ばかりたった時、その日も甚兵衛は尋ねあぐんで、ぼんやり家に帰りかけますと、ある河岸の木影に、白髯の占い者が卓を据えて、にこにこ笑っていました。甚兵衛はそ

の白髯のお爺さんの前へ行って、人形の行方を占ってもらいました。

お爺さんはしばらく考えていましたが、やがてこういいました。

「ははあ、わかったわかった。その人形は地獄に居る。訳はないから取りに行くがいい」

甚兵衛はびっくりして、なおいろいろ尋ねましたが、白髯のお爺さんは眼をつぶったきり、もうなんとも答えませんでした。

甚兵衛は家に帰って、その話を猿にいってきかせ、占い者の言葉を二人で考えてみました。地獄に居る

が訳(わけ)はないというのが、どうもわかりませんでした。
二人は一晩(ひとばん)中考えました。そして朝になると、二人ともうまいことを考えつきました。

甚兵衛はこう考えました。

「これはなんでも、地獄(じごく)に関係(かんけい)のある古いお寺(てら)か荒(あ)れはてたお寺(てら)に違(ちが)いない」

猿(さる)はこう考えました。

「地獄(じごく)のことなら鬼(おに)の思うままだから、鬼(おに)の人形をこしらえたら、それであの人形が取りもどせるだろう」

それからは、猿は大きな鬼の人形をこしらえ、甚兵衛は荒れはてた寺を尋ねて歩きました。ちょうど都の町はずれに、大きな古寺がありましたので、甚兵衛はそっと中にはいりこんで様子を窺ってみますと、畳もなにもないような荒れはてた本堂のなかに、四、五人の男が坐って、なにかひそひそ相談をしていました。よく見ると、それがあの盗賊どもではありませんか。甚兵衛はびっくりして、見られないように逃げだしてきました。そして猿にそのことを告げました。

「もう大丈夫です」と猿はいいました。「人形は盗賊

どもの所にあるに違いありません。私が行って取りもどしてきましょう」

甚兵衛は危ながりましたが、猿が大丈夫だというものですから、そのいうとおりに従いました。

晩になりますと、二人は鬼の人形をかついで、盗賊の古寺へ行きました。それから猿は人形の中にはいって、一人でのそのそ本堂にやってゆきました。本堂の中には蠟燭が明るくともっていましたが、盗賊どもは酒に酔っ払って、そこにごろごろ眠っていました。

「こら！」と猿は人形の中から大きな声でどなりました。

盗賊どもはびっくりして起きあがりますと、眼の前に大きな鬼がつっ立ってるではありませんか。みんな胆をつぶして、腰を抜してしまいました。

鬼の人形の中から、猿は大きな声でいいました。

「貴様どもは悪い奴だ。甚兵衛さんの生人形を盗んだろう。あれをすぐここにだせ、だせば命は助けてやる。ださなければ八裂きにしてしまうぞ」

「はい、だします、だします」と盗賊どもは答えました。

やがて盗賊どもは、生人形を奥から持ってきましたが、首はぬけ手足はもぎれて、さんざんな姿になっ

ていました。それも道理です。盗賊どもは人形を踊らして、金儲けをするつもりでしたが、中に猿がはいっていないんですから、人形は踊れようわけがありません。盗賊どもは腹を立てて、人形の首を引きぬき、手足をもぎ取って、本堂の隅っこに投げ捨てて置いたのです。それを見て猿は、鬼の人形の中からどなりつけました。

「不都合な奴だ。しかしおとなしく人形をだしたから、命だけは助けてやる。どこへなりといってしまえ。またこれから泥坊をすると許さんぞ」

盗賊どもは震えあがって、逃げうせてしまいました。

猿は鬼の中からでてきて、甚兵衛と二人で、壊れた人形を抱いて、非常に悲しみました。けれども、いくら悲しんでもいまさら仕方はありません。二人は壊れた人形を持って、田舎の町へ帰りました。

甚兵衛はもうたいへん金を儲けていましたし、壊れた人形を見ると、再び人形を使う気にもなりませんでした。猿も都を見物しましたし、そろそろ元の山にもどりたくなってる折でした。それで二人は、壊れた人形を立派に繕って、それを山の神社へ納めました。猿は山の中へもどりました。

甚兵衛は、もう誰が頼んでも人形を使いませんでし

た。そして山からときどき遊(あそ)びにくる猿(さる)を相手(あいて)に、楽(たの)しく一生(しょう)を送(おく)りましたそうです。

底本：「天狗笑い」晶文社
１９７８（昭和53）年４月15日発行
入力：田中敬三
校正：川山隆
２００６年12月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。